

研究動向

国語教育史研究の研究動向（2005年～2014年）

八木 雄一郎*

Yuichiro YAGI

1. はじめに

1-1. 研究方法論への着目

本稿は、2005年から2014年までの国語教育史研究の動向を整理し、その成果と展望について考察するものである。本稿においては、特に各論考が採用している研究方法のあり方に着目し、その分類と検証を行っていく。

全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』において「歴史的研究の方法論」を執筆した有澤俊太郎は、方法論を自覚し確立することは「それぞれの課題に対するアプローチに一定のルールを付与すること」であると述べる¹⁾。問い（序論）に対する答え（結論）を導いていく過程に、ある明確な筋道が存在することが、論文が論文として、研究が研究として成立する条件であることは、国語教育史研究においても全く変わらないだろう。この筋道に明確さをもたらすのが方法論の存在であると思われる。方法論という「ルール」の存在が、その研究の筋道を固め、高い蓋然性と強い説得力を持つ論文を生み出すのである。

国語教育史研究の対象となり得る事象（教育実践や理論研究など）自体は、これまで連綿と積み重ねられてきているが、それらの事象が誰かの手によって集約され、分節化・言語化されることによって、はじめて「歴史」と呼ばれることになる。事象の連続・蓄積が、そのまま「歴史」になるわけではなく、そこには事象の収集家や語り手の介在が不可欠なのである。したがって、同一のテーマや資料・文献による研究でも、それを扱う人間が異なれば、結果的に全く異なる結論が導かれるということも多分に生じ得る。これはおそらく、歴史研究というものに本来的に備わる性質ともいえるだろう。だからこそ国語教育史研究には、明確な方法論の存在と、その自覚・確立が求められるのである。方法論が明示されることによって、我々はそれらの研究を比較し、検証し、そして議論することがで

*信州大学教育学部

きようになる。つまり、研究上の対話の可能性を担保するものが、方法論の存在といえよう。

なお、方法論は一般的に「研究の方法」という節・項の中で示されることが多いが、各論考が採用している研究方法は、その題目からも判断することが可能である。題目設定というかたちによって考察・分析対象を限定するとき、そこには、内容面（何を論じるか）だけではなく、方法面（どのように論じるか）に関する思考も反映されるからである。したがって本稿においては、各論考が「研究の方法」として明示している内容だけではなく、題目などから読み取れる研究の観点や枠組みにも着目しながら、方法論の整理と考察を行っていきたい。

1-2. 方法論の分類

前掲の有澤は同書において、国語教育史研究の方法論を以下のように分類している。

(1) 歴史的事実の記述

ア 文献学的方法 (philological approach)

イ 統計的方法 (statistical approach)

ウ 内容分析 (content analysis)

(2) 歴史的事実の解釈

ア 問題焦点法 (problem-focused approach)

イ 解釈枠 (framework for interpreting)

本稿においても、この分類を基軸として、この10年間の国語教育史研究を整理していきたい。ただし、有澤が前掲書において言及した2000年以前の文献群と、本稿において参照した文献群（単著は2005～2014年刊行の32点、学会誌論文（全国大学国語教育学会編『国語科教育』掲載論文）は第57集（2005年）～第76集（2014年）掲載の40点）とでは、研究の全体的な傾向にいくつかの相違が見られるため、その記述の配分には必然的に軽重が生じている。この傾向の意味についての考察は、本稿の最後に「成果と展望」として述べていきたい。

なお、同一の筆者が単著と学会誌論文の双方において業績を残している場合は、単著の方を優先的に採り上げ、学会誌論文については紹介を割愛していることがある。

2. 2005～2014年の国語教育史研究の動向

2-1. 歴史的事実の記述

2-1-1. 文献学的方法

本稿において参照した論考のすべてが、何らかの文献を資料として用いている。しかしそれらのすべてが「文献学的方法」を採っているわけではない。この場合の「文献学的」とは、文献の存在や成立を調査・考察の対象としている研究のことを指す。

単著においては眞有澄香（2005）、望月久貴（2007）、井上敏夫（浜本純逸編）（2009）、吉田裕久（2010）、野地潤家（2011a）、前田眞澄（2011）、府川源一郎（2014）が挙げられる。眞有は、明治期から昭和戦前期にかけて刊行された高等女学校用の教科書（読本）の内容・構成・編集理念などの変遷をたどっている。望月は明治初期の国語教育の状況について、法令、教科書、教授法などに関する文献の解題を通して多角的に考察している。井上（浜本編）は、「国語教科書の歴史」「作文教育の歴史」「国語学力観の歴史」「国語教育通史の試み」「国語教育人物史」について、明治～昭和戦後期における文献資料を博搜し、通史的に整理している。吉田は戦後初期の占領下における沖縄・奄美地方で作成・編集された国語教科書を収集し、その内容や編纂背景を明らかにしている。調査に当たっては、関係者へのインタビューなどを行っているところに方法論上の特色がある。野地は、国語教育学研究の展開について、各時期の重要文献・事例の解題を行いながら紐解いている。前田は明治後期から大正期の綴り方教材組織論に大きな影響をもたらしたシュミーターの教育論の移入・摂取の経緯を究明している。シュミーターによるドイツ語原書を探索し、それを全訳した上で、その思想と方法が日本の実践家たちにどのように受容され展開していったのかを詳細にたどっている。府川は、明治初年から30年代を範囲とし、小学校教科書（読本）の内容の変遷をたどりながら、当時の教育実践と教材の展開を解明している。国語教科書を含む様々な子ども文化を総合的に「リテラシー形成メディア」と捉えることにより、文部省検定教科書にとどまらず、当時の子どもたちが触れ得たであろう多様な読み物媒体の連関について探究している。

学会誌論文においては、前掲の府川の他に、安直哉（2005）、菊野雅之（2011）が挙げられる。安は形象理論の中で使用される「直観」「自証・証自証」「統一」といった術語の出典を調査している。菊野は、稲垣千穎編『本朝文範』『和文読

本』『読本』』といった「近代最初の古典教科書」刊行の過程を明らかにし、その刊行が国語教育史においてもつ意味を考察している。

2-1-2. 内容分析

研究対象となる文献（教科書、各種論考、法令・行政文書など）の記述や論述の内容を分析する（読み解く）ことによって、対象の特性を検証する研究群である。本項目に該当すると思われる文献は多数存在するため、「教科書教材などの分析」「国語科の思想、目標、方法などの分析」「国語教育の実践の分析」に区分し、整理を試みたい。

(1) 教科書教材などの分析

学会誌論文として、西本喜久子（2010, 2011, 2013）、都築則幸（2013）、茅野政徳（2014）がある。西本は、明治初期（1873(明治6)年）に発行された『小学讀本』におけるペスタロッチー主義の受容の様相を、読本の内容の分析を通して明らかにしている。さらに、同書の原拠である『ウィルソン・リーダー』の編纂者ウィルソンの生い立ちや経歴を調査することを通して、同書がどのような思想背景の元に編纂されたものであるかについて考究するなど、継続的な研究を行っている。都築は、1911(明治44)年の中学校教授要目改正において廃止された「国文学史」の内容が、それ以降「講読」の中でどのように教授されていったのかを、当時の教科書教材の調査を通して検証している。「講読」の中で示された国文学史的内容が、結果として「国民常識」となり人口に膾炙していったことを指摘している。茅野は昭和24年度から平成23年度までに刊行された小学校教科書から宮澤賢治を扱った教材10編を抽出し、その内容と掲載意図、および時代の要請なども検討しながら、時代の変容に呼応して変遷する賢治像のあり方について調査している。賢治の人間像は「自己犠牲的精神」「自然・生命尊重」という二側面にとどまらず、各時代が求める規範的価値観の持ち主として、時々の思潮に応じて変化してきたことを明らかにしている。

(2) 国語科の思想、目標、方法などの分析

単著としては、加藤宏文（2005）、小西寿津実（2005）、安直哉（2005）、渡辺春美（2007）、浜本純逸（2008）、益地憲一（2008）、山室和也（2008）、坂口京子（2009）、甲斐睦朗（2011）、大内善一（2012）、田近洵一（2013）、松山雅子（2013）が挙げられる。加藤は戦後「新教育」における国語(科)単元学習の理念・

目標・内容・方法の受容と展開を、山口県の「光プラン」の調査・分析を中心軸として検証している。小西は、野地潤家の国語教育個体史研究の分析をはじめとして、個体史研究の理論、方法、意義を検証している。国語教育史の研究法自体を研究対象としているところに特色がある。安は、20世紀におけるイギリスの中等音声国語教育の展開をたどり、その過程に「五つの波」が存在したことを見出している。渡辺春美は戦後古典教育論の理念・実践の諸相を描出している。浜本はロシア・ソビエトにおける文学教育の実質と発展の軌跡を明らかにしている。1830年から1980年までを対象期間として、「教師の社会意識と文学教育」「文学機能観」「目標観」「内容論」「教材論」「方法論」を視点にして論じている。益地は、友納友次郎の読み方教授論の成立・発展の過程を、著書の分析を通して行い、その特質と今日的意義を考察している。山室は、戦後の文法教育における構文指導の実態と問題点を、教科書の記述の分析などを通して明らかにしている。坂口は、戦後日本に導入された経験主義国語教育の摂取の実態を解明している。当時の行政文書、教師用指導書、カリキュラム・プランなどを詳細に分析し、経験主義国語教育の意義と可能性について論じている。甲斐睦朗は、終戦直後の国語国字問題に関して、当時の文献、資料、記録などを博搜し再検証することによって、当用漢字表や国立国語研究所の成立過程、「日本人の読み書き能力調査」やローマ字運動の実態、志賀直哉や森有礼、保科孝一といった人物たちの言語観や国語国字問題への貢献などについて、新たな見解を示している。大内は、大正から昭和戦前期に活躍した田中豊太郎の綴り方教育論における「形式」「内容」一元論の構築過程をたどっている。田中の実践および理論が「生活指導」と「表現指導」との統一止揚という方向で展開していく軌跡を詳述している。田近は、昭和前期から今日に至る「読むこと」や「読解」についての理論・議論について、思索的な探究を行っている。さらに教科目標、教育課程、教科書といった多様なトピックに関して、その史的展開と意味について検証している。松山は、イギリスにおける初等英語（国語）科教育の史的経緯に関して、1970年代から2010年までを範囲として整理している。ナショナル・カリキュラムの制定過程と実施後の動向を明らかにしながら、その動向が具体的な教育実践にどのような影響をもたらしたのかについても言及している。

学会誌論文としては、前掲の坂口（2007）、加藤（2007）、山室（2008、2011）の他に、齋藤智哉（2007）、瀧口美絵（2009、2011）、秋保恵子（2011a、2011b）、

中谷いずみ (2011), 西岡智史 (2014) が挙げられる。齋藤は西尾実の理論に着目し、戦前に植民地教育に関わる中でその思想が変化していく過程と背景を考察している。瀧口は1930年代における国語科と映画教育の関係性に関する議論の様相を、当時の雑誌資料をもとに調査している。また、「メディア教育史において転換点となる論争」とされる西本三十二と山下静雄との間の議論を、国語科教育の課題として捉えようとした波多野完治のメディア教育観について検証している。秋保は奥野庄太郎の読方教育理論の形成過程を、奥野の垣内松三『国語の力』に対する批評の内容から考察している。さらに、「心理的読方」に関する著作を分析し、その理論的背景と言語思想について検証している。中谷は大正初年前後のメディア言説の分析を通して、「教育」と「芸術」「文学」をめぐる言説の変容について考察している。当時の「文学教育」の隆盛が、「教育」「芸術」「文学」のとらえ方に深く影響したことを指摘している。西岡は明治30年代に刊行された秋山四郎編『漢文教科書』と、その指導書である『漢文教科書備考』の分析を通して、国語科成立期における漢文教授法がどのように形成されていったのかを考察している。近代学校教育制度の確立期といえる明治30年代においては、漢文教科書に関してもヘルバルト教授理論といった近代的教授法の導入が試みられた一方で伝統的な「素読」「講釈」「会読」といった教授法は批判されていたことを指摘している。

(3) 国語教育実践の分析

単著としては田中宏幸 (2008), 北岡清道 (2009), 菅邦男 (2009), 伊東武雄 (2010), 野地潤家 (2011b), 有働玲子 (2011) がある。田中は、金子彦次郎の作文教育の内容を作文解説書や教科書から明らかにし、その特徴や今日的意義を論じている。北岡は、各地域で行われた生活綴方実践の実態を綴方文集の内容から検証している。菅は、宮崎県における生活綴方実践が『赤い鳥』を起点として展開していく様相を、投稿作品や文集などを基に調査している。伊東は、自身の古典教育・学習の系譜を个体史研究として記述している。野地は、芦田恵之助の国語教育実践の展開とその影響について、芦田の論考や実践、そしてそれに対する批評などから検証し、个体史研究的にまとめ上げている。有働は、大正期から昭和30年代における「話しことば教育」の史的変遷を「模索期」「発展期」「雌伏期」「復興期」の四期に区分し、その過程における理論と実践の蓄積を精査し、体系的に示している。話しことば教育の成果として有働は「お話をういて相手意識を尊

重する指導をおこなう」「話すことによる自己表現の内容に注目する」「読みの内容を朗読表現に結びつける」「共有体験を用いて話の構想を指導する」といった実践が展開されたことを挙げている。

学会誌論文としては、前掲の田中（2006a, 2006b）の他に、出雲俊江（2008, 2009）、原田大樹（2011）、坂東智子（2011）、熊谷芳郎（2012）古賀洋一（2014）が挙げられるだろう。出雲は1930年代に峰地光重が行った郷土教育の実践を、その著書の内容などから考察している。原田は、「話しことば指導の父」と評される上原森芳による標準語指導の内容・方法、後世への影響、そして標準語指導が「強権的」と評される要因を、文献資料の検討や関係者へのインタビューから考究している。板東は、大村はまの入門期古典学習指導の実際について、生徒たちの学習記録から大村の年間カリキュラムを「復元」することによって明らかにしている。熊谷は1870年代から1890年代にかけて興隆した「討論會」について、その内容、自由民権運動における「討論會」の影響関係、当時の課題について調査している。それによって今日のディベートとの異同や、旧制中学校の「討論會」が自由民権運動の一環であったことを明らかにしている。古賀は2000年～2014年を範囲として説明的文章の授業実践の動向を調査・整理し、「読解方略」指導の実践的成果と課題について検証している。その結果、1990年代と比して論理読解型の授業が増加し、「意識性」に達する読解方略指導が多く確認できる点に成果を見出すとともに、中学校段階で「選択性」「総合性」を意図的に学習させる授業実践の構築を今後の課題として挙げている。

2-2. 歴史的事実の解釈

2-2-1. 問題焦点法

ある問題意識に基づいて、歴史的事実の解釈・再構成を試みる研究群である。次項で採り上げる研究群も含め、いずれも、一見無秩序な事実・記録の集合体の中に、今日的な視点から「意味」や「物語」を見出そうとするものである。

単著としては、石川巧（2008）、甲斐雄一郎（2008）、山東功（2008）、村上呂理（2008）、石毛慎一（2009）、渡辺哲男（2010）が挙げられるだろう。石川は、「国語」入試が国語教育の中で担った役割とその変遷について、入試問題の分析や時代思潮の検証を通して考察している。甲斐雄一郎は、1900(明治33)年の小学校令において「国語科」という教科が成立し、その教科内容に一定の確立をみるま

での過程を明らかにするために、主に1886(明治19)年から1901(明治34)年の期間に刊行された教科書群を網羅的に精査している。①地理、歴史、理科などの他教科的内容を多く含み込んでいた従来の読書科が、「国語科」として教科の自立性を獲得するまでの過程、②「国語ノ規範」が創出されるまでの過程、③従来の「読書」「作文」「習字」に「話シ方」を加えた、領域統合的な「国語科」が成立するまでの過程について、当時の教材およびそこで採用された文体の出典や変遷などを詳細に調べ上げ、「国語科成立の指標」である如上の3点の事象が生じ得た要因と論理を考察している。山東は、近代日本における文法(研究)と唱歌の関連性と、その展開を明らかにしている。村上は、独自の言語文化を育んできた地域において近代日本の国語教育(「近代言語教育」)が担った意味を検証するため、日本(沖縄)とベトナムの言語教育史の比較を行っている。「近代言語教育」の内実、各地域における言語文化との間に生じた矛盾や問題、およびそれらをめぐる議論の分析を行うことで、今後の言語教育への展望を求めようとしている。石毛は、近代以降の国語科教育の中で漢文がどのような比重を持っていたのかについて検証している。明治期から昭和戦前期を「近世儒学踏襲期」「国体論整備期」「国体論浸透期」「国体論硬直期」の4期に区分し、各期における文献(論考、教科書など)や漢文をめぐる議論などの分析を通して、漢文の位置づけの変遷を歴史的にたどっている。渡辺哲男は、1930~50年代の国語教育における「文字」と「音声」の関係性の変遷の過程とその論理を、さまざまな主張の「存立基盤」を明らかにしながら考察している。

学会誌論文では渡辺哲男(2008, 2014)の他に、富安慎吾(2006, 2007a, 2007b, 2012)がある。富安は、戦後の漢文教育思潮の変遷の契機や背景を、当時の議論とその展開の分析を通して考察している。

2-2-2. 解釈枠

前項の諸方法をモデル化し、事実を解釈していくというアプローチをとる研究群をここでは採り上げたい。

単著としては梶井英人(2006)、幸田国広(2011)、武藤清吾(2011)がある。梶井は1947(昭和22)年から1998(平成10)年までの学習指導要領を指標として、各時期における学力観、目標観、方法論などの分析を通して、「国語力」がどのように捉えられ、推移してきたのかについて検証している。幸田は、「教科構造」とい

う観点から戦後の高校国語教育の理念、カリキュラム（科目）、教科書などのあり方を検証している。武藤は1920～30年代にかけて刊行された複数の文芸読本や国語教科書（芥川龍之介編『近代日本文芸読本』など）を「教養実践」として捉え、それらを通して「日本型教養」形成の基盤が生成される過程を、各文献の内容から検証している。

学会誌論文では、幸田（2005, 2006, 2013）の他に八木雄一郎（2007, 2009）が挙げられる。八木は、「国語」（日常的に使用される言語・文章）とそれに対置される「古文」という概念を設定し、それらの形成・成立過程を、明治期～昭和初期の議論や教科書の分析を通して明らかにしようとしている。

3. 成果と展望

3-1. 「歴史的事実の記述」に関して

以上の内容をふまえ、この10年間の国語教育史研究に関する成果と展望について考察していきたい。

まず、2000年以前においては比較的多く見られた通史の研究や文献解題の研究は減少している。もちろんこのような立場を採る研究は本稿においても紹介しているが、その中には原稿の完成から長い時間を経て刊行された書籍も複数あり（野地、望月、井上（浜本編）など）、全く新しい通史的・文献解題の研究を行う余地を見出すことは難しくなっているようにも思われる。これは、このジャンルの成果の蓄積と充実を示すものであるだろう。これらに加えて、『国語教育史資料』（東京法令）『近代国語教育論大系』（光村図書）『国語教育基本論文集成』（明治図書）といった資料集成もすでに各種刊行されており、我々は現在、必要な梗概的知識と基礎的認識を書籍のかたちで容易に入手することができるようになっている。一方、この10年間における文献学的研究の足跡は、新しい文献の存在や、教材の典拠を明らかにした研究に見出すことができるだろう（吉田、府川など）。戦後直後や明治初期という時期は、いずれも「新しい国語教育」の出発点であり、多角的な検証が期待されるころではあるが、資料的に不明な点が多いのも現状である。そのような時期を扱う研究に際して、文献学的研究は大きな貢献を果たすだろう。それはまた、新しい研究の対象や視座を開拓することにもつながっていくはずである。

次に、内容分析的アプローチに含まれる文献は多数あり、そこで用いられる方

法論も多様であるが、ここで着目したいのは、分析・検証の対象となる資料の所在についてである。本稿で扱った論考群の中には、採り上げる資料自体に新規性が見出せるものと、すでに他の資料集成や全集などに集録・掲載されている情報を引用するかたちで論を進めていくものがある。前者は文献学的側面においてもその意義が見出される（加藤，坂口など）。後者については、分析・検証のための方法論のあり方とその明示が決定的に重要になってくると思われる。本稿の冒頭で述べたような方法論の必要性が顕在化するのが、このような研究の場合であるためである。

3-2. 「歴史的事実の解釈」に関して

この節において採り上げた論考には、近代日本において国語教育が担ってきた役割・意味を問う研究や、「国語科」およびその教科内容の形成・成立過程を究明する研究が多く含まれていることに特徴があるだろう。すでに2001（平成13）年時点（『国語科教育』第48集「50周年記念特集号」）において、府川源一郎は「私たちが『国語』教育と呼称してきた『国語』という概念自体が、この国の近代化の過程ときわめて密接に関係していたことが問い直しの対象になっている」と述べ、イ・ヨンスク（1996）『「国語」という思想』（岩波書店）やハルオ・シラネ／鈴木登美編（1999）『創造された古典』（新曜社）などについて言及しているが、他にも鈴木貞美（1998）『日本の「文学」概念』（作品社）、齋藤希史（2005）『漢文脈の近代』（名古屋大学出版会）のように、国語科の存在や教科内容のあり方を「近代日本」という枠組みの中で問う研究の刊行が相次いだのが、この約20年来の動向である²⁾。本稿においても、テーマ・方法論に関して、こうした研究の影響下にあると思われる論考は少なからず見受けられる。

このような研究に際して方法論の側面で留意したいのは、解釈の際に引用される資料の妥当性と必然性である。何らかの問題意識や枠組みに基づいて、文献の記述などから時代思潮やある概念の様相を読み取ろうとすると、我々はまず「その文献に記されていることは事実か」「そこで示されている主張や意見は、本当に当時の時代性を反映しているのか」「文献の執筆者は、この文脈で引用するのに本当に適切な人物か」といった問いを立てなければならないだろう。つまり、テーマ設定の視点や解釈のあり方に重点を置く研究の場合にも、文献学的な検証は重要な意味を持つのである。本稿で紹介した論考の中では、たとえば甲斐雄一

郎は、「国語科が成立するまでの過程」という「問題焦点法」的な問いを立てながらも、その方法論は多分に文献学的である。そしてその文献調査の重厚さと緻密さが、解釈の精度を保証しているように思われる。

本稿は「歴史的事実の記述」「歴史的事実の解釈」に分けて研究成果の整理を試みたが、両者は決して別個に存在するものではない。「記述」（文献学的研究など）の蓄積は、同時に新しい「解釈」（問題焦点法など）を創造するための土壌の充実を意味しているだろう。そして新しい「解釈」は、同時により新しく、より確かな「記述」の存在を要請するだろう。この相乗的な運動にどのように関わるのかについては多様な選択肢があり、それについての模索が国語教育史研究の原動力となるはずである。そして本稿が、その模索の際に活用しうる地図となれば幸いである。

※本稿は八木雄一郎「歴史的研究に関する成果と展望」『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』（全国大学教育学会編，教育出版，2013年，pp.467-474）の内容に加筆・修正を施したものである。

参考文献

（1）単著

- 石川巧『「国語」入試の近現代史』講談社，2008年
石毛慎一『日本近代漢文教育の系譜』湘南社，2009年
伊東武雄『古典学習个体史—わたくしが学んだ古典—』溪水社，2010年
井上敏夫（浜本純逸編）『教科書を中心に見た 国語教育史研究』溪水社，2009年
有働玲子『話しことば教育の実践に関する研究—大正期から昭和30年代の実践事例を中心に—』風間書房，2011年
大内善一『昭和戦前期の綴り方教育論にみる「形式」「内容」一元論—田中豊太郎の綴り方教育論を軸として—』溪水社，2012年
甲斐睦朗『終戦直後の国語国字問題』明治書院，2011年
甲斐雄一郎『国語科の成立』東洋館出版社，2008年
加藤宏文『戦後国語(科)単元学習の出発とその去就—山口県における実践営為を中心に—』溪水社，2005年
北岡清道『生活綴り方実践史研究』溪水社，2009年

- 幸田国広『高等学校国語科の教科構造—戦後半世紀の展開—』溪水社, 2011年
- 小西寿津実『国語教育個体史研究の考察』溪水社, 2005年
- 坂口京子『戦後新教育における経験主義国語教育の研究—経験主義教育観の摂取と実践的理解の過程』風間書房, 2009年
- 山東功『唱歌と国語—明治近代化の装置—』講談社, 2008年
- 菅邦男『「赤い鳥」と生活綴方教育』風間書房, 2009年
- 田近洵一『現代国語教育史研究』富山房インターナショナル, 2013年
- 田中宏幸『金子彦次郎の作文教育—中等教育における発想力・着想力の指導—』溪水社, 2008年
- 野地潤家『国語教育学史研究』溪水社, 2011年(a), 同『近代国語教育史研究』溪水社, 2011年(b)
- 浜本純逸『ロシア・ソビエト文学教育史研究』溪水社, 2008年
- 府川源一郎『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究—リテラシー形成メディアの教育文化史—』ひつじ書房, 2014年
- 眞有澄香『「読本」の研究—近代日本の女子教育—』おうふう, 2005年
- 前田眞澄『ドイツ作文教育受容史の研究—シュミューダー説の摂取と活用—』溪水社, 2011年
- 榭井英人『「国語力」観の変遷—戦後国語教育を通して—』溪水社, 2006年
- 益地憲一『大正期における読み方教授論の研究—友納友次郎の場合を中心に—』溪水社, 2008年
- 松山雅子『イギリス初等教育における英語（国語）科教育改革の史的展開—ナショナル・カリキュラム制定への諸状況の素描—』溪水社, 2013年
- 武藤清吾『芥川龍之介編「近代日本文芸読本」と「国語」教科書 教養実践の軌跡』溪水社, 2011年
- 村上呂里『日本・ベトナム比較言語教育史—沖縄から多言語社会をのぞむ』明石書店, 2008年
- 望月久貴『明治初期国語教育の研究』溪水社, 2007年
- 山室和也『文法教育における構文的内容の取り扱いの研究』溪水社, 2008年
- 吉田裕久『占領下沖縄・奄美国語教科書研究』風間書房, 2010年
- 渡辺哲男『「国語」教育の思想—声と文字の諸相—』勁草書房, 2010年
- 渡辺春美『戦後における中学校古典学習指導の考究』溪水社, 2007年

(2)『国語科教育』掲載論文

- 秋保恵子「奥野庄太郎における読方教育理論の形成過程—垣内松三『国語の力』への論評を手がかりとして—」第69集, 2011年a, pp. 59-66, 同「奥野庄太郎の『心理的読方』に関する考察」第70集, 2011b, pp. 20-27
- 出雲俊江「峰地光重の郷土教育に関する考察—生活主義教育としての郷土教育—」第63集, 2008年, pp. 35-42, 同「『写生』の展開としての峰地光重実践—初期綴方実践から郷土教育へ—」第66集, 2009年, pp. 43-50
- 加藤宏文「戦後国語(科)単元学習の『理論的基盤』についての通時的考察—『光プラン』における『集团的思考』への場合—」第62集, 2007年, pp. 19-26
- 菊野雅之「古典教科書のはじまり—稲垣千穎編『本朝文範』『和文読本』『読本』—」第69集, 2011年, pp. 90-83
- 熊谷芳郎「旧制中学校草創期(1872年-1899年)における『討論會』—自由民権運動における『討論會』との関係から—」第71集, 2012年, pp. 11-18
- 幸田国広「『文学編』『言語編』分冊教科書の消滅要因に関する—考察—光村凶書『中等新国語』を中心に—」第59集, 2005年, pp. 28-35, 同「『現代国語』設置による高校必修科目二分化の問題点—益田勝実『現代国語』観の機能—」第59集, 2006年, pp. 11-18, 同「『定番教材』の誕生—『羅生門』教材史研究の空隙—」第74集, 2013年, pp. 14-21
- 古賀洋一「説明的文章の読みの授業実践における読解方略指導の展開—2000年以降を中心に—」第76集, 2014年, pp. 23-30
- 齋藤智哉「西尾実における国語教育観の転換—植民地視察による『話しことば』の再発見—」第61集, 2007年, pp. 11-18
- 坂口京子「戦後新教育における経験主義国語教育摂取の実態—日米の国語教育観の差異を観点として—」第62集, 2007年, pp. 43-50
- 瀧口美絵「昭和戦前期における国語科と映画教育の問題—1930年代の映画教育史の議論に注目して—」第66集, 2009年, pp. 19-26, 同「国語科教育におけるメディア教育論争の史的検討—『西本・山下論争』の議論に注目して—」第70集, 2011, pp. 44-51
- 田中宏幸「中等作文教科書における作文課題の考察—佐々政一『日本作文法』(一九〇三)及び『中学作文講話』(一九一七)の場合—」第59集, 2006年a, pp. 42-35, 同「大正・昭和初期の高等女学校用作文教科書に見られるインベン

- ジョン指導—金子彦二郎『現代女子作文』（一九二五年）を中心に—」第60集，2006年b，pp. 50—43
- 茅野政徳「戦後小学校国語検定教科書における宮澤賢治の伝記教材の変遷」第75集，2014年，pp. 32—39
- 都築則幸「旧制中学校における国文学史教育の変遷—明治末期から昭和前期を中心に—」第74集，2013年，pp. 93—86
- 富安慎吾「昭和20年代初期における漢文教科書—『文化教育』的漢文教育観の展開—」第59集，2006年，pp. 19—26，同「昭和30年代前期の国語科教育課程における漢文学習の位置づけ—『高等学校学習指導要領国語科編』（昭和31年）改訂時の議論に注目して—」第61集，2007年a，pp. 19—26，同「昭和20年代後期における漢文教育観の転回点—『東洋精神文化振興に関する決議』（昭和27年）に注目して—」第62集，2007年b，pp. 51—58，同「昭和30年代後期の漢文教育思潮における『漢文の多重性』についての認識」第71集，2012年，pp. 19—26
- 中谷いずみ「一九一〇年代における『人格』と『芸術』—片上伸『文芸教育論』前史—」第70集，2011年，pp. 123—116
- 西岡智史「国語科成立期における漢文教授方法の研究—秋山四郎編『漢文教科書』『漢文教科書備考』を中心に—」第76集，2014年，pp. 39—46
- 西本喜久子「1860年代のアメリカにおける『ウィルソン・リーダー』（HARPER'S SERIES. School and Family Readers.）の一評価—Harper's School and Family Series of Standard Text-Books. (1864) のばあい—」第63集，2008年，pp. 51—58，同「『小学読本』（1873）の研究—アメリカのペスタロッチー主義的要素の受容を中心に—」第68集，2010年，pp. 35—42，同「『ウィルソン・リーダー』の編纂者 Marcius Willson に関する研究」第70集，2011年，pp. 68—75，同「明治初期『小學讀本』初版の編纂に関する再検討」第73集，2013年，pp. 39—46
- 原田大樹「鹿児島県における標準語指導の実際—上原森芳の実践を通して—」第69集，2011年，pp. 35—42
- 坂東智子「大村はまの年間カリキュラムに位置づく入門期古典学習指導」第69集，2011年，pp. 51—58
- 府川源一郎「田中義廉編『小学読本』冒頭教材の出典について—『五人種』の図像

とその意味―」第68集，2010年，pp. 59-66

八木雄一郎「『国語』と『古文』の境界線をめぐる対立―『尋常中学校教科細目調査報告（1898(明治31)年)における上田万年と小中村義象―』第61集，2007年，pp. 27-34，同「中学校教授要目改正（1931(昭和6)年)における教科内容決定の背景―『現代文』の定着に伴う『古文』概念の形成―』第65集，2009年，pp. 43-50

安直哉「国語教育における形象理論の生成」第57集，2005年，pp. 12-19

山室和也「国語教育における三上章の文法教育論の今日的意義と今後への課題―三上章の文法教育批判と中学校教科書に掲載された教材の分析を通して―」第63集，2008年，pp. 19-26，同「戦後文法教育史における増淵恒吉の文法教育論―文法研究との関わりと文法教育論の分析を中心に―」第70集，2011年，pp. 92-99

渡辺哲男「西尾実における言語活動主義の展開過程―山口喜一郎との邂逅前後を中心に―」第57集，2005年，pp. 20-27，同「『言語活動』概念の誕生―小林英夫によるソシユール言語学の導入と1930年代におけるその影響―」第63集，2008年，pp. 11-18，同「秋田喜三郎における『創作的読方』の形成過程」第75集，2014年，pp. 96-103

註

- (1) 有澤俊太郎（2002）「歴史的研究の方法論」『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書，p. 452
- (2) 府川源一郎（2001）「『国語』教育研究のゆくえ」『国語科教育』第48集，p. 27